

「スズメ研究のスズメ」



講師：三上 修
(北海道教育大学函館校 准教授)

日本で日々生活していれば、スズメを見たことがないという方は、まずいないでしょう。「小笠原諸島で生まれて、一度も島から出たことがない」のであれば、そういうこともあるかもしれませんが……。それほど、スズメというのは身近で、日本全国にいる鳥なのです。

これだけたくさんいるのだから、スズメのことなんて調べ尽くされているような気もしますが、そうでもありません。日本の鳥学の歴史の中で、スズメはあまり研究がされてこなかった鳥なのです。

その理由は、鳥学者の性質に依ります。鳥の研究者はやはり自然の中で研究がしたいのです。そして悠久の自然の流れの中で、研究対象とする鳥が、いかに進化しているのかというところに興味を持つのです。たとえば、餌を採る行動だったり、繁殖行動だったり、注目するのです。

では、スズメを研究する面白さはどこにあるかといえば、それらとは対極に位置します。「スズメが、いかに人為的に作られた環境をうまく利用しているか」が、面白い点なのです。たとえば、スズメは一般住宅に巣を作りますが、住宅の形状は時代とともに変わってきています。それにいかに対応しているのかというような点が興味深いのです。スズメと人との直接的な関わりも、スズメ研究の面白さと言えます。人はスズメを稲を食べる害鳥として駆除してきました。近年では、人との関わりの中でスズメの個体数は減少しています。これが普通の鳥だったら、「人間活動による犠牲者」という感じが出てきますが、敵もさるもの（サルじゃなくてトリですが）で、スズメのほうも逞しく対応してきています。

スズメは身近であるがゆえに、我々の文化の中にもしばしば登場します。たとえば、お伽噺の1つである「舌切り雀」にも出てきますし、「僅か」なことを意味する「雀の涙」という慣用表現もあります。これがミソサザイだったらよくわかりません。「ミソサザイの涙」と言われたら鳥を良く知っている人からすれば「スズメの涙よりも少ない」と結構ウケるかもしれませんが、そうでなければ、ミソサザイが鳥なのかすらわかりません。「味噌漬けのザーサイ」と勘違いされる可能性だってあります。スズメはスズメであるがゆえに、我々の文化の中に息づいているのです。

スズメがどんな鳥か、いま一度見直してみると、日々の生活で、スズメを見かけた時に楽しめること間違いなしです。本講演では、そんな話題を提供できればと思います。

講師プロフィール

1974年島根県松江市生まれ。2004年東北大学大学院博士課程修了。博士（理学）。九州大学、立教大学、岩手医科大学を経て、2014年から現職。スズメをはじめとした都市に生息する鳥と人との関係について研究中。著書に『スズメの謎』（誠文堂新光社）、『スズメ一つかず・はなれず・二千年』（岩波書店）などがある。

日時：平成30年11月3日（土・祝）13時30分～15時00分

場所：アビスタ（我孫子市生涯学習センター）ホール

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所